仏アジアセンターとの協議

日時：2007 年 7 月 2 日
場所：日本国際問題研究所大会議室
主催：日本国際問題研究所（JIIA）
　　アジアセンター（フランス・パリ）

【日本側参加者】

- 友田錫・日本国際問題研究所所長
- 平林博・元駐印・駐仏大使
- 倉田秀也・杏林大学教授
- 高木誠一郎・青山学院大学教授
- 高原明生・東京大学教授
- 末次克彦・アジア太平洋エネルギーフォーラム代表幹事
- 田中浩一郎・エネルギー経済研究所中東研究センター長
- 菊池努・青山学院大学教授
- 二階堂幸弘・日本国際問題研究所研究部長
- 小窪千早・日本国際問題研究所研究員

【フランス側参加者】

- François Godement　アジアセンター所長
- Pierre Lévy　フランス外務省分析予測センター長
- Manuel Lafont-Rapnouil　フランス外務省分析予測センター
- Philippe Le Corre　フランス国防省
- Isabelle Saint-Mézard　フランス国防省
- Mathieu Duchatel　アジアセンター研究員
- Guibourg Delamotte　アジアセンター研究員

2007 年 7 月 2 日、日本国際問題研究所（JIIA）とフランスのアジアセンターとの協議が当研究所大会議室で行われた。会議の概要は以下の通りである。

【セッション 1：北朝鮮問題と北東アジアの安全保障】

日本側からは、北朝鮮問題について、六者協議の内容を受け、六者協議における北京での合意について、そこに盛り込まれたことよりも盛り込まれなかったことが重要であり、北朝鮮の安全保障については盛り込まれていないということについて指摘がなされた。フランス側からは、台湾問題について報告がなされ、台湾における国連加盟運動や新憲法を求める独立への運動と、それに対する中国の姿勢について、人民解放軍には政治的失敗を招かずに介入する手段はなく、中国は台湾に今後より静かな政治攻勢を掛けるであろうと指摘がなされた。議論では、北朝鮮問題に対処する制度的枠組みについて、事態の進展は事実上米朝関係に掛かっているとの指摘があったほか、問題は合意の欠如ではなく、合意を実行する仕組みができているかであるとの意見が出された。また北朝鮮問題に対する中国の懸念について言及されるともに、中国への武器輸出について、フランスは今後否定的であるとの説明がなされた。

【セッション 2：中国問題と日本及び米国との関係】

［2-1：日中関係］

日本側からは、安倍首相の訪中などで日中関係は好転しており、日中間には共通の国益もあるが、日本と中国双方に国内政治の問題があり、特に中国の胡錦涛政権は「和諧社会」という政策を打ち出しているが、その背後には中国が自国の将来に不安感を持っている現状があり、そのため日中関係には脆弱性が伴うという点が指摘された。フランス側からは、日中間の歴史問題について報告がなされた。議論では、日中の歴史問題について、フランスとドイツ、フランスとアルジェリア、ドイツとソ連、ドイツとポーランド等々、欧州での二国間の和解の例と比較して議論がなされるとともに、欧州で和解を可能とした要因（欧州という大枠の存在、共通の脅威の存在など）がアジアにはないという点が指摘された。

［2-2：米中関係と日米同盟への影響］

フランス側からは、江沢民政権が経済発展などを契機に米中関係の改善に成功し、中国が米中関係を非常に重視しているとともに中国の多極世界への志向について指摘がなされた。日本側からは、米中関係と日米関係が持つ安全保障のジレンマについて言及された。議論では、米国がイラク政策の失敗から東アジアの地域統合についてより積極的な姿勢に変わっているとの意見が出たほか、EU の対中武器禁輸解除の問題や、米国を含まない衛星測位システム（ガリレオ）での協力など、中国が戦略的に欧州を重視しているという点が指摘された。

【セッション３：インドの台頭とアジアへの影響】

日本側からは、インドの地政学的位置の重要性について指摘がなされ、日本にとっての「自由と繁栄の弧」のまさに中央にインドが位置するという点が言及され、インドが上海協力機構のオブザーバーとなり、またインド系のアフリカ人などアフリカへの影響力も持っていることなどから、インドの今後果たしうるより大きな世界的役割について指摘がなされた。フランス側からは、インドが米印関係の改善に成功したともともに、中印関係も好転しているものの依然問題はあることが指摘され、インドが外交の伝統として自主独立を非常に重んじてきた点について報告がなされた。議論では、インドの核政策に焦点が集まり、特にフランス側からは、インドが自国は核を持ちつつ核の拡散は行っていない点を指摘し、インドの核政策に理解を示し、フランスも核をめぐる米印の合意と同じラインにあるという意見が出された。また、インドが民主主義国であることの外交への影響についても議論され、インドは整った民主主義国であるが周辺国の民主化については消極的であるという指摘がなされた。

【セッション４：中東地域の安定】

日本側からは、アフガニスタン、イラク、イランの情勢について報告がなされた。特にアフガニスタンについてはカルザイ政権の下での情勢の悪化などについて言及され、またイランについては、核問題ではイランには核の平和利用というコンセンサスがあると指摘がなされた。フランス側からは、特にイラン問題に焦点を当て、欧州は中東の安全に多大な関心を持つとともに、もしイランが核兵器を持てばそれは単に地域の問題ではなく、イランが核の平和利用に徹するとしても拡散の問題については依然懸念が残るとし、イランの核問題への懸念を示した。議論では、イラン、イラク、アフガニスタンそれぞれについてイラクへの自衛隊派遣の背景や、アフガニスタンにおける「タリバニゼーション」の傾向についても指摘されたほか、それぞれの問題と密接に関わるイスラエル-パレスチナ問題についてもその解決の方向の見えにくさなどについて言及がなされた。